

福崎町鍛冶屋地区のかくしほちよじについて

福崎町教育委員会社会教育課 樋 口 碧

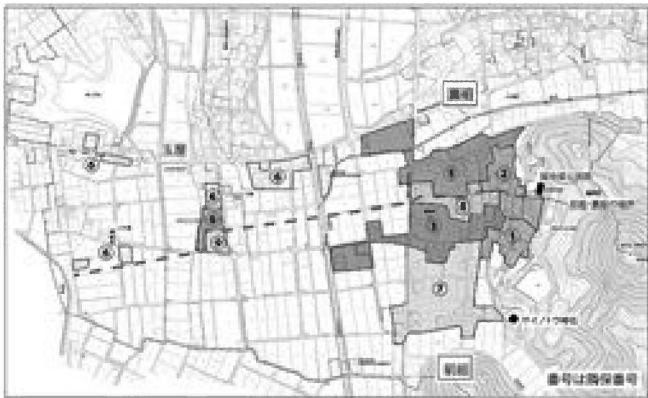
はじめに

福崎町八千種地区に所在する鍛冶屋地区では、毎年成人の日の前日から翌日にかけて「歳の当」、1月26日に「宮の当」と呼ばれる行事が行われている。この行事は複数の行事から成るものである。また、これらの行事は住民のうち、輪番で選ばれた9名が全て取り仕切り行っており、彼らは「親」と呼ばれている（以下、「当人」と呼ぶ）。その9名の氏名は「順番帳」に毎年記載されており、確認できる最古のもので明治20年のものがあることから、少なくとも130年以上継承されてきていることが分かる。

この行事は「かくしほちよじ」という、子どもがほちよじを隠すという他の地域では見られない特徴から昭和53年に町の指定文化財となっているが、本来どのような行事であるのか、また、どのようにして現在まで継承されてきたのか、町の記録等から考察したい。

1. 鍛冶屋地区イットウについて

福崎町には地区によって同じ姓を



鍛冶屋地区 組分け

持つ世帯が占める割合が大きいとこがある。これをイットウと呼び、鍛冶屋地区では、中塚、白井、上田イットウがある。「歳の当」や「宮の当」の各年度の当番の名が記載されている「順番帳」を見ると、明治20年から41年まで、それら以外の姓は確認できない。これは、他地域からの移住がほとんどなかったことや養子縁組等の理由が考えられる。

後に、現在の8・9隣保の地区で宅地開発が行われ、他地域から人が入ってきており、違う姓がみられるようになる。

2. 歳の当・宮の当

当人は現在の鍛冶屋公民館西側の東西方向の道から南北に分けて北を裏組、南を前組に分け、裏組から4人、前組から5人が選ばれる。現在は、玉屋周辺で宅地が増えたため、8組を裏組、9組を前組に分けている。この9人の中から2人が「親の親」になる。2人の「親の親」はそれぞれ「歳の当」と「宮の当」の責任者になり、主体となって行事を仕切る。

(1) 歳の当

現在は成人の日の前日から翌日にかけて行われているが、以前は小正月の前日と翌日にかけて行われていたそうだ。成人の日が月曜日になった関係で日程が変わっている。以下、平成31年1月12日、13日に行われた行事を中心に、各要素となる行事の状況を記す。

① ほちよじ立て

当人たちが話し合い、1月第1日曜日頃に竹や袴づくりの準備が行われた。9人の当人が竹取りから藁編み、ほちよじ立てまで全て行う。藁



個人宅にたてられたほちよじ
(『広報ふくさき』昭和50年1月号から)

は前年の秋に230把程度用意しておく。竹の編み方は決まっており、6本の竹を使い、12本の藁の紐で固定する（閏年については13本）。葉がたわわとしていようすは豊作を示すため、できるだけ葉が多く、まっすぐな竹を選ぶ。藁でできたまぶきは、30mほどの長さになる。現在、ほちよじは「歳の当」前日に鍛冶屋公民館前の駐車場に設置されるが、公民館で行われる以前は「親の親」の家の庭に立てられていた。「親の親」の家の庭が狭い場合、他の当人宅に立てたこともあったそうだ。

この日、「お賽さん」をサイノトウ神社から掘り出す。「お賽さん」はご神体とされ、毎年同じ場所に埋められている。13個埋められており、平年は12個、閏年は13個掘り出した後に洗い、公民館にまつられる。「お賽さん」は円形の20cm程の大きさの石である。

②酒宴

成人の日の前日の18時から催される。酒宴会場に女子はいなかった。大人の他、厄年、還暦、その年度に集落に入った者が献酒する。

酒宴の開始時に「歳の当」の責任者である「親の親」が祝詞を読み上げ、大人及び献酒の紹介をした後で、住民に升に入った「御洗米」と呼ばれる新米を机の列ごとに回す。ナンテンの葉で新米をすくい、一人7、8粒程度口に含む。皆に回った後に酒宴が始まる。

酒宴は集落の全戸から一人ずつ参加し、親睦を深める機会となっている。区の外に出た大人の息子らもこの行事のために実家に戻り、酒宴に参加することがある。

酒宴会場の前にはお供え物が並ぶ。小豆飯^{あずき}1杯、升に入った「御洗米」3杯、塩、酒（一升瓶）、大根1本、にんじん1本、みかん3個、いりこ1皿である。その隣に行事に使う御幣やその年の祝詞、順番帳を入れた箱、「お賽さん」が並ぶ。

③ほちよじ隠し

19時頃になると、大人がほちよじを解体して運びやすいように竹を切り、子どもによって集落内に隠される。現在は安全のため、小学校5、6年生が保護者同伴のもと行っているが、聞き取りによると、以前は地区内の小学生男女が子どもだけでほちよじを解体して隠し、その後さらに中学生らが大人に見つからないような別のところへ隠していたそうだが、子どもがほちよじを隠す理由は伝わっていない。



④帳渡しの儀

20時頃になると次の大人への引継の儀である帳渡しの儀が行われた。「順番帳」を箸で持ち、歳の当の「親の親」、宮の当の「親の親」がそれぞれ次の年の者へ渡す。大人は輪番で約13年に1度回ってくるが、「親の親」は9人が話し合いの上で決める。

⑤無言の行

0時から、「親の親」二人によって無言の行が行われた。茶碗に1杯ずつの小豆飯といりこ1匹と箸を1本持ち、それぞれが決められた道を通ってサイノトウ神社へ向かって歩く。到着後、無言のまま1本の箸で持っていた小豆飯といりこを食べ、その後箸で茶碗を叩き、食べ終わったことを合図する。そして「おうおう」と言い、箸を決められた場所に立て、元来た道に戻る。

⑥狐追い

大人7人で行われた。「親の親」二人は公民館で待機していた。熊野神社を起点に出発する下の組と稲荷社を起点に出発する上の組に分かれて行われる。全員が2m弱の竹の棒を持ち、それぞれのコースで二つずつ御幣^{ごひ}を持ち、決められた場所に挿して帰ってくる。熊野神社本殿、稲荷社にそれぞれ向かい、お参りをしてから出発する。歩くときは、

「キツネガイオロ」と一人が言い、他の者が続いて「オロヨ」と繰り返す。

御幣は村の境界に挿されていることから、村を悪いものから守るという意味があるそう。この行いは、狐を悪さをするものと見なし、地区の外へ追い出すことを意識したものである。

⑦ほちよじ探し

小学生が隠したほちよじを大人が探す。ほちよじは集落内全域が隠し場所であるため、朝まで見つからなかった年があったそう。

見つかったほちよじはサイノトウ神社に大人たちの手により立てられる。その時に、公民館でまつっていた「お賽さん」を中に入れる。



狐追い 経路

⑧ほちよじ焼き

ほちよじ焼きは朝6時から始まる。8時くらいまで住民が正月飾りを焼くためにやってくる。住民は火に当たりながら餅や子ども習字を焼く。習字は高く舞い上げれば上達すると言われている。

この時、玉屋から5個の「お賽さん」が運ばれ、一緒に温められた。玉屋では別に「お賽さん」が伝わっている。新しい宅地であったためであろうか。なお、「お賽さん」を温める理由については伝わっていない。

温められた「お賽さん」は、サイノトウ神社の決められた場所に埋め戻され、御幣を立ててまつられる。玉屋の「お賽さん」の数は、初めに玉屋に住んでいた5軒の家のことを指すのではないかと伝わる。

玉屋では、元は道祖神の下に「お賽さん」を埋めていたが、昭和52年頃の耕地整理で道祖神である石造物が別の場所に移動したため、サイノトウ神社に埋めるようになったそうだ。「歳の当」の前日に「お賽さん」を掘り出し、玉屋の当番の家の床の間にまつられ、ほちよじ焼きの時に温められる。玉屋の古老によると、道祖神の元に埋められていた頃は、「お賽さん」は温めてはおらず、当番の家の床の間にまつって行事が終

わった後にそのまま埋め戻されていたとのこと。現在の場所に移った時に鍛冶屋地区のものと一緒にほちよじで温め、サイノトウ神社に埋めることになったと思われる。現在、玉屋の当番の家は3軒のみである。

玉屋に続き、公民館でまつられていた「お賽さん」も火から取り出され、サイノトウ神社に埋められる。「お賽さん」を埋めた後、当人でその年1年の無病息災を祈っておまつりを行う。

なお、現在その場所をサイノトウ神社と認識している者はほとんどいなかった。埋められる場所が地区の境界に近いことから「賽の神」がまつられているのだろう。

(2) 宮の当

「宮の当」は、熊野神社で行われる。18時頃から神事を行い、その後酒宴を催す行事である。祭壇には、いりこ、塩、洗米、みかん、大根、人参、赤飯、御神酒を供える。近年はその年の当人と翌年の当人、地区の役員のみ参加となっているが、かつては「歳の当」と同様に、ほとんどの住民が参加していたそうだ。神事は地区の神主が行い、その後皆で食事をする。

3. 歳の当の変化

明治20年から現在まで130年間

途切れることなく継承されている「歳の当」。現在は映像や写真を用いながら翌年の当人に引き継ぎをしているが、ビデオ等の電子媒体がない時代、口承や紙媒体により伝えるしか方法がなかったため、行事の詳細については少しずつ変化してきたと考えられる。

教育委員会には、昭和48年、平成6年、平成13年、平成14年、平成15年、平成16年、平成24年の記録があり、行事の変化を追うことが可能である。

4. 「順番帳」の記録から

「順番帳」には、変化が起こった際に文字にて記録（覚書）が残されている。「順番帳」は4冊現存する。「歳の当」「宮の当」用の箱がそれぞれあり、その中に裏組、前組の「順番帳」が2冊ずつ入っている。変化があるときは、地区の総会で決めていくとのことだ。以下、「順番帳」から変化のあった年の記述を記す。

(1) 明治20年

最も古い年代で、この頃は集落を北組と南組に分けていた。

(2) 昭和35年

「昭和三十五年一月執行の歳の当より従来の二組制を三組制に改め当人は各組毎に三人とする」とある。戸数が増えたため、北(5・6組)・

中(1・2組)・南(3・4・7組)

の3か所に分かれて宴会を催していたそうだ。しかし「順番帳」は2冊のまま、2組、4組が同じグループで酒宴を催すが、前組と裏組の者が混在する状況となっており、この状況は平成3年、会場が公民館になるまで続く。他に、「歳の当」及び「宮の当」に係る経費についてもそれぞれ「順番帳」に記載されている。

(3) 昭和49年度

「昭和四十九年度よりトントの焼場所が変更された十四日夕方自由場所とする」と記されているが、昭和53年に町の文化財に指定されたことから、「昭和五十三年より町指定文化財となり従来に復する(朝十五日に焼くことと総会で決定する)」となっている。

(4) 平成3年度

「順番帳」に記載されている当人の名が裏組では3人から4人、前組では3人から5人に増えている。戸数増加のため、当人の数が増えたのかもしれない。

5. 町内の民俗行事

福崎町内各地区でも、それぞれ多様な民俗行事が行われているが、鍛冶屋地区のように複数の行事が同時に行われるものはほとんどない。以

下、要素となる民俗行事について鍛冶屋地区のものと比較する。

(1) 狐追い

「歳の当」の構成要素である狐追いは、町内では他に西大貫・南大貫地区で行われているが、鍛冶屋地区と異なるのは、大人と子どもで行われることだ。南大貫地区では、トンドの前日に地区を3つに分け、毎年持ち回りで各当番の家で料理を振る舞い、その後に狐追いを行う。地区の稲荷社から出発し、地区内を歩く。大人が「キツネのオロヨ」と言った後、子どもが「オロオロヨ」と続く。狐が作物を荒らさないように願って行われるものである。西大貫地区では、トンドと同じ日に行われている。現在は、少子化等の関係で数年に1度の頻度で行われているようだ。

狐狩り(狐追い)とは、「小正月の前夜に行う狐に象徴される害獣をムラから追い出し福を招く行事」のことで、兵庫県・京都府・大阪府の北部から福井県・鳥取県にかけて分布している。唱える言葉も一様ではないが、狐のみならず、病害等をムラから追い払う意の言葉を唱えているところがほとんどのようである(『日本民俗大辞典』参照)。

(2) トンド(左義長)・斉灯

行事の主要要素であるトンド(左

義長と呼ぶ地区もある)は町内34地区(上中島含む)のうち21地区が行っている。11地区ではトンドは行わないが、2月3日の節分の日に斉灯を行っている。また、10地区が両方実施している。両方実施している地区については、人口の多い地区であるかトンドを各隣保で行い、斉灯を地区全体で行っているかのどちらかである。トンド、斉灯ともに冬に行われる火祭として位置付けられているが、行事の意味は異なる。

トンドは「小正月に行われる火祭行事」である。正月飾りの処理を行うとともに、正月の神送りとして考えられることが多い。この行事には、子ども組の活動が顕著に見られ、鳥追いなどの行事が付随することもある。また、厄落としの行事が行われることもあり、この火で「モノヅクリの団子」などを焼いて食べると病気になるいとして焼くところも多く、町内では餅を焼いて食べている地区がほとんどである。

斉灯は「小正月の火祭」で、東日本では、道祖神がまつられているところで行われる(『日本民俗大辞典』参照)。

トンド、斉灯ともに火祭とされており、左義長は中部地方で道祖神祭とも考えられている例があり、斉灯

も道祖神がまつられているところで行われる。このことから、両者は道祖神の祭りとして各地で受け継がれている可能性がある。鍛冶屋地区でも地区の境界付近で行われていることを考えると、「ほちよじ焼き」は道祖神の祭と考えられよう。

「歳の当」の要素のうち、狐追いとほちよじ焼き(トンド)は地区の境界を意識した道祖神の祭りであることが民俗例から考えられた。行事全体として地区の外に悪病等を追いかう意味を持っているのであれば、子どもがほちよじを隠す行為や無言の行についても、同様に地区外へ悪いモノを追い払う意味を持っている可能性があるのでないだろうか。

おわりに

鍛冶屋地区では、「歳の当」は住民が必ず参加しなければならないとされている行事である。近年、宅地開発等で外から当地区に移り住む人が増えているが、区長は徹底して地区の行事には参加するよう伝えていそうだ。このような、元々住んでいる住民の意識やそれを受け入れる外部から移り住んだ人の強い意識がこの「歳の当」「宮の当」の行事が成り立っていると見える。

少子化が叫ばれる昨今、民俗行事の担い手が少なくなっているという

状況は、当地区も例外ではなく、子どもがほちよじを隠すという行事名ともなっている「かくしほちよじ」や「順番帳」からも行事の姿が少しずつ変化していることが分かる。ただし、このような状況下でありながら、ほちよじ隠しを大人が手伝うなど、緩やかにその姿を変えながらも継承されている姿が見受けられる。この行事が、何十年先も続いていることを願ってやまない。

この調査は、兵庫県主体の「兵庫県の祭り・行事調査」に際して、兵庫県から調査を委託された宗教民俗学者の本林靖久氏と行ったものである。この記録を作成する際、左記の方々に聞き取り調査に協力いただいた。(敬称略)

中塚龍一、中塚保彦、上田照博、中塚貞義、中塚重信、上田喜代文

参考文献

- 『福崎町史』第一巻
広報ふくさき 昭和50年1月号
- 『日本民俗大辞典』上 1999年
吉川弘文館
- 『日本民俗大辞典』下 2000年
吉川弘文館